

## 日本と中国の酒に関することわざの対照考察(1)

王 雪  
浮 田 三 郎

### 1. はじめに

ことわざは文字通り「言技」であり、言語芸術の一表現形式として、特に節奏性に富む簡潔な言語形式のなかに、思想性豊かな人生哲学が凝縮され、人々の日常行動の指針ともなっている。ことわざの表現の中には様々な世界が表現されているが、ここでは酒に関することわざの世界に焦点を当て、日本と中国の酒に関することわざの対照比較考察をする。ことわざの世界でも酒は人類の文化・歴史とは切っても切れぬものであったことが窺える。古今東西、酒にまつわることわざや名言名句は数え切れない。

酒の歴史と言えば、中国では既に禹王の時代から、酒が史書に登場する。「酒は百楽の長」と言われるが、それは漢の時代の「食貨志(米穀・財貨の歴史をしるした巻)」という本から出てきた。日本では縄文時代に既に酒が造られていたと言われている。米の作り方を伝えた人たちが、同時に米を使うお酒の造り方も伝えたということは十分考えられる。

酒が作り出され、それを飲むことが増えるにつれて、酒についてのことわざも生み出されてきたのであろう。酒がどんな役割を果たすかあるいは、その効果はすべて人間次第である。「酒に関することわざには、大きく分けて酒を賛美するものと、酒の害を説くものと両者がある。物にはすべて長所と短所があり、美点すなわち欠点である場合が多い」と鈴木(1962, P. 110)は述べている。酒に関する日中両国のことわざの対照比較をしてみると、表現の面白さ、それに組み込まれている両国の多様な处世術、見方、人生観も窺うことができる。

### 2. 分析資料と考察方法

日本のことわざの用例は、『故事俗信ことわざ大辞典』(小学館 1982)を資料の中心とした。『故事俗信ことわざ大辞典』(小学館 1982)は、いろいろな由来を持つことわざや俗説などを約 43,000 項目収めている。さまざまな成り立ちの表現を、文献・資料として記録し、専門辞典としてこれまでに見られない規模のものと言える。

一方、中国のことわざは、『中国俗語大辞典』(上海辞書出版社 1989)を中心に、データを取り出した。この『中国俗語大辞典』は 15,000 あまりの項目のことわざを集録している。

中国の現代のことわざ辞書の中では、ことわざの数から言えば、最も規模の大きいことわざ辞典である。内容的にも、詳しい説明を加え、中国のことわざへの理解もいっそう深まるように作られている。

以上の辞典を中心に、集録されている酒に関することわざを取り出すと、日本のことわざの場合は169句、中国のことわざは92句現われた。

考察方法としては、これらのことわざを便宜的にはあるが、下記のような基準に従い、分類する。(1)中国から伝わってきており、出典が考証できる両国のことわざ；(2)表現は異なるが、意味内容が類似している両国のことわざ；(3)表現と意味内容はほぼ同じであるが、由来が考証できぬ両国のことわざ；(4)表現は異なるが、意味内容が大体同じである両国のことわざ；(5)表現も意味内容も対応していない両国のことわざ。

今回は(2)、(3)、(4)のことわざについて、その意味内容とことわざの比喻表現を主にし、対照比較考察を進めようと思う。なお、日本のことわざ集に見られるものでも、中国や西洋から伝わってきた出典のあることわざ、表現も意味内容も対照していない両国のことわざ、日本の各地に言い伝えられてきた酒に関する俗信・俗習・禁忌などは省略して考察を進める。

### 3. 日中のことわざの対照比較

両国のことわざを対照しやすくするため、日本のことわざには「J」、中国のことわざには「C」という符号をつける。

#### 3.1 表現は異なるが、意味内容が類似している両国のことわざ

この類の類似している両国のことわざは必ずしも全てが一致するわけではないが、裏に隠されている比喩的な意味としては、まったく一致しているのが特徴である。

##### 3.1.1 酒と酔態

人と人の交わりによく酒が登場するのは日本でも中国でも同様のようである。例えば、

###### J1 酒が沈むと言葉が浮かぶ

のように「酒の酔いが深くなると、胸の奥に秘めていたことがつい出てしまう」ことになる。「杯を重ねていけば、浮いた話、色気のある話が多くなるということ。『沈む』という言葉には暗いイメージが強いが、こと酒に関してはその限りではない。酔うと口数が多くなり、失言も出ることに」(永山・川嶋 1988, P.102) なる。表現としては、「沈む」と「浮かぶ」という反対語を使用した見事なことわざである。「酒」と「言葉」、「沈む」と「浮かぶ」を対照することにより、人が酒を飲み、酒が人の五臓六腑にしみこんでいくにつれ、逆に言葉が口元に浮かんでくるということである。ただ、飲みすぎると、危うくなるとも暗示している。中国のことわざにも、

C1 酒 后 吐 真言  
酒（を飲んだ） あと 吐く 本音（を）

というのがあり、「酒に酔った後、つい本音を吐いてしまう」という。「真言」とはそのま  
ま真の言である。本心からの言葉を中国人は「真言」と言う。「本音」の意味に当たる。こ  
のことわざは中国ではよく知られているもので、お酒を飲んだら、ついになにか秘密や言い  
たくて言えない事を言うてしまう恐れがあるといっている。

J1 と C1 では、人間は酔えば、頭が「ボー」としていくのが普通であり、酔った人は  
秘密を漏らしたり、普段心に秘めていることも全部さらけ出したりすることも珍しくない。  
人々に「酒を飲み過ぎないようにしなさい」という戒めでもある。

### 3.1.2 酒と処世

上でも述べたが、酒はまた人生に楽しみを与える。

それを代表することわざは、

J2 酒なくて何の己が桜かな

であろうか。ここでは、「酒がなければ花見をしていてもいっこう面白くない」と言い、花  
見をすることを楽しみの代表の一つとして、酒がなければ、どんなことをしても面白くな  
いというニュアンスを伝える。酒は日本の社会風土に深くしみこんでいるように思える。

一方、中国のことわざでは、

C2 万事 不如 杯 在手  
万事 及ばない 杯 手に在る

「万事、杯の手に在るにしかず」というのがある。日本では、「桜＝花見＝楽しみ」であり、  
中国の「万事」とまったく同義ではなく、少しニュアンスが異なる。「杯」はつまり、酒を  
盛る道具であり、ここに「酒」という漢字はでてこないが、「杯」が「酒」の意味で使われ  
ており、中国人の酒の飲み方を端的に表わしている。中国では、何事をするにも、「コネ」  
が大切なので、人に何かを頼む時、食事するか食事しないかということによってまったく  
反対の結果をもたらすこともある。食卓で人間同士の交流によって、人間関係もスムーズ  
にはかどることができる。だから、中国人に言わせると、酒を酌み交わすのは、互いの友  
誼を深めるためであり、また酒食は生活の中で大切に扱うべきものだからだということだ  
ある (cf. 王湘仁 2001)。

### 3.1.3 酒と出世

従って、酒は立身出世にも影響する。

J3 朝寝酒は貧乏のもと

あるいは、「酒と朝寝は貧乏の近道」ということわざがあり、「酒は身をもちくずすもとに  
なることと、仕事もせず朝遅くまで寝ていることはたちまち貧乏になる」と酒飲みを戒め  
ている。中国でも、

C3 好 吃 懶 做, 到 老 不 成 貨

好む 食べること (を) 不精 やる、 年を取る ならない 一人前

「食いしん坊の怠け者は年をとっても、一人前の人になれない」という。C3には「酒」という言葉は出ていないが、「吃」（「食べる」の意味）の対象として、「酒」も含まれている。

「好吃懶做」という言葉では、「働かずに、食うことだけが好きな怠け者」のイメージを浮かべさせる。「貨」はもともと「荷物」の意味であるが、「成貨」というのは口語体で人を軽蔑する語感がある。「到老不成貨」というのは、時間が経ち、年をとっても一人前になれないということである。「一人前の人になれないとは必ずしも貧乏であるということではないが、中国人が思い浮かべるイメージでは何も役立たず、だらしのない人」のことである。

「朝寝酒」と「好吃懶做」の共通点は、人の怠ける様子を浮き彫りにする点である。

以上挙げられたことわざは語彙の組み合わせが同じではないが、しかし、意味内容的に同じようなことを述べる類似していることわざである。

### 3.2、表現と意味内容がほぼ同じであるが、由来が考証できぬ両国のことわざ

ことわざは口承文芸であり、「民衆によって作られ、用いられ、そして主に口伝で伝えられている口語性の強いものであるから、一般にその最初の出典や作者を探し出すことはできない」と温瑞政（1983, P. 13）は言っている。日中両国のことわざの対照考察をするとき、表現が同じでないが、表現の意味内容が同じであることわざは、3.1 で見た通りであるが、言葉の形式も意味内容もほぼ一緒であることわざは少なからずある。

#### 3.2.1 酒と友

3.1.2 に見たように、両国のことわざとも酒は人と人の交わりの場面には必ずと言っていいほど登場する。

J4 酒は知己に遇うて飲むべし

C4 酒 逢 知己 千杯 少

酒 逢う 知己 千杯 少ない

「知己」は自分をよく知ってくれる人、知人、親友の意である。「酒は知己に会えば千杯でも少なく、話がうまく合わねば、半句も多い」という。酒を真に味わうには、親友と出会って飲むのが一番よい。酒も話も気心相手が第一と言っている。

#### 3.2.2 酒と处世

しかし、酒の飲み方次第で、大変なことにもなる。

J5 酒よく事を成し、酒よく事をやぶる

C5 酒 能 敗 事, 也 能 成 事

酒 できる 失敗 物事、も できる なる 物事

「物事の成功も失敗も酒の力によるところが大きく」、C2 のように、楽しいことも物事も酒が事をうまく運ぶし、その飲み方を誤ると全てが台無しになるというのである。両句は、

世の中でうまく物事がスムーズにはかどらせるには、酒の力を上手に利用しなければならないということを表現した。

### 3.2.3 酒と人間性

また、酒の効力は人間性まで暴いてくれる。

J6 酒は人を酔わしめず人自ら酔う

「酒を飲んで酔うのは酒の罪ではなく、飲み人自身の罪である」という。中国でも、

C6 酒 不酔 人 人 自 酔

酒 酔わせない 人 人 自ら 酔う

「酒は人を酔わせず、人は自ら酔う」といい、J6 と C6 の二句もまったく意味が同じである。酒を飲んだあと、人間は酒の働きでふだん表に出ない自分の性格などがつつい出てしまう傾向がある。酔っ払いのスタイルも人さまざまであるが、このような酒の効能を利用しようとした、種々の酒宴を連想することができる。

### 3.2.4 酒の悪効果

さらに、酒が進むと、

J7 酒は百毒の長

C7 酒 乃 穿 腸 毒薬

酒 だ 破る 腸 (を) 毒薬

「体に害毒となるあらゆる物の中で、酒はその最たるものである」といい、J7 と C7 は酒を慎重に飲まなければならないことを述べている。「酒は良い」ということわざもあるが、ともかく、飲み過ぎたら、かえって悪い影響と結果を招いてくる。また、日本では、例えば、「酒は飲め、酒に飲まれるな」、「一杯は人酒を飲む、二杯は酒酒を飲む、三杯は酒人を飲む」などと酒をほどほどに飲むべきことを教えることわざもある。「上戸は毒を知らず下戸は薬を知らず」では、上戸はつい害を忘れて深酒し、酒が毒になると述べている。

さらに、

J8 海中より盃中に溺死する者多し

C8 溺 海 者 寡, 喪 酒 者 多

溺れる 海 人 少 死ぬ 酒 人 多

「海で溺れて死ぬ者より、酒に溺れて死ぬ者のほうが多い」などと、「酒に溺れる」ことを海での溺死に喩え、J7、C7 では、酒を毒に喩えて、酒の飲み方を言及している。「寡」は少ないという意味。「喪酒者」は「酒でなくなった人」のことを指す。これは、酒飲みを節制する気のない人を戒めることわざである。「誇張」という修辞法を使い、同じ液体状態の物なのに、酒は人間の日常生活と密接な関係を持ち、気をつけて飲まなければならないと論じている。

### 3.2.5 酒と礼節

次も、酒の席ではよく使われることわざである。

J9 かけつけ三杯 (三献)

C9 迟到 罰 三杯

遅れる 罰 三杯

J9 で見られた「献」あるいは「三献」については、神崎が「簡単な肴 (一品) をだして少量の酒 (盃一杯) をすすめ、それを一応納めるのを一献とする。古く宮中や殿中の儀式では『式三献』で納めるのを正式な作法とした。『かけつけ三杯 (三献)』といった言い方には、右の伝統の不断の連続性があるのである」(1994, P. 37) と述べている。ここでは、両国のことわざとも「遅れた者には三杯の罰。酒席に遅れた者には罰がある」という意味である。宴席に遅れたら、多くの場合は三杯の酒を飲まされる。この習慣は日本も中国も同様であるが、酒が好きな人にとって、罰であるかどうかは、また検討する必要がある。それにしても、上戸も下戸も関係なく、罰の一つの形式として、いまでも、行われている。

また、

J10 下戸の肴荒らし

では、酒宴の席で酒を飲めない者が酒のかわりに膳の上の料理を食い荒らすこと」をいい、

C10 口 酒 不 嘗, 撈 菜 大王

一口 酒 ない 味わう、取る おかず 大王

C10 では、「お酒を全然口にしないが、料理を散らかすだけ」と表現し、酒を飲まない人 (下戸) を揶揄している。

以上挙げた七組のことわざから見ると、これは両国の間でどちらの国からどちらの国に伝わってきたか明確ではなく、あるいは、両国民がそれぞれ酒に対する理解が同じで、共感を呼び、自分の言語で酒に対する気持ちを後世に伝えようとしたと思われ、以上のようなことわざがでてきたと言えるだろう。酒に関することわざは数多くあるが、表現と意味がはっきりと対応しているものはそれほど多くはなかった。

### 3.3、表現は異なるが、意味内容が大体同じである両国のことわざ

この項目で見ることわざでは、言葉の組み合わせとして、大体同じ語彙を使い、表現されているが、異なる立場や角度から論述している場合もある。

#### 3.3.1 酒と女

洋の東西を問わず、酒と女とばくちで身を亡ぼす人は多く (cf. 浮田 1988, P. 303)、

J11 酒と女とばくちは男の三道楽

といい、J11 では、男の耽溺しやすい三つの道楽として、酒、女、ばくちを挙げている。

C11 酒 荒 色 荒, 有 一 必 亡

酒 みだりに 女 みだりに、ある 一つ 必ず 亡ぼす

C11 では、「酒か女の色に耽溺するなら、必ず国が亡ぶ」といい、昔の歴史物語では、酒や女にうつつを抜かす帝王は国政に無関心で、必ず新しい帝王が取って代わる。このように、

王朝の交代で古い王朝が滅び、新しい王朝に代わる節目には、必ずと言っていいほど、酒や女が登場する。現代では、封建帝王の時代がもう過ぎたので、個人に注目が集まってきた。時代の移り変わりにより、C11の意味も男に対する戒めになる。

さらに、中国では

C11' 酒 乱 性, 色 迷 人  
酒 乱れ 情、女 魅せる 人

「酒は人の感情を乱す、男は女の色に惑わされる」と酒と女の非を責めることわざがある。酒と女のせいで、男は自分を失うという話もどこにでもありそうである。また、

C11" 茶 是 花博士, 酒 是 色媒人  
茶 だ 仲人、酒 だ 媒介人

では、「花博士」と「色媒人」と言った言葉を使用し、これらは男女の縁結びを仲立ちする者という意味で、「茶と酒は色情を媒介するもの」であると表現している。

### 3.3.2 酒と貧乏

3.1.3でも述べたように、酒は貧乏の近道であるが、

J12 下戸の建てたる倉もなし、お神酒あがらぬ神は無し

などと、「下戸だからといって、その分の酒代をためて富裕になったということもないし、神様でさえ喜んで酒を召し上がる」と酒は必ずしも悪くないと暗示することわざもある。

「酒飲みどもの気焰に共通なのは、上戸が我が党を持ち上げ、下戸をむやみにこきおろすことである。その代表的なのは『下戸の建てた倉はない』であろう」と鈴木(1962, P. 117)は述べている。また、

J12' 上戸の建てた蔵はあるが下戸の建てた蔵はない

「酒を飲む人で財産を作った人はあっても、酒を飲まない人で財産を作ったひとはいない」ともいい、3.3.1では酒を批判する逆の意味のことわざもある。中国でも、

C12 吃 酒 三年 穷, 戒 酒 三年 穷  
飲む 酒 三年 貧乏、やめる 酒 三年 貧乏

「三年酒を飲んでも貧乏、三年酒をやめても貧乏」とあり、酒飲みは下戸を嘲ったり、また、酒好きであることを自己弁護することである。酒を飲むか飲まないかに関わらず、人がまじめに働けば貧乏にならないだろうという裏の意味も含まれている。しかし、J3でも見たようになんと言っても、「上戸のこわした倉はあり」で「酒は貧乏への近道」であろう。

### 3.3.3 酒と友

酒と友の関係は3.2.1でも見たが、

J13 酒は先に友となり、後は敵となる

「酒は友をつくるきっかけになるが、後でその友が敵となる原因にもなる」とやはり飲み方を考えなくてはならないと指摘する。

C13 酒 肉 朋友, 柴 米 夫妻, 盒儿 亲戚

酒 肉 友達、柴 米 夫婦、箱 親戚

と C13 では、「友達を酒を飲んだりして、つくられるものである。夫婦は柴と米があると、何とか毎日を過ごせる関係である。親戚同士の間で、お互いにプレゼントを贈ることは親戚関係を維持するための必要な手段だ」という。世の中のいろいろな人間関係の中で酒と肉の友達関係は何か危うい関係を暗示している。一方、C13' では、

C13' 喝 酒 喝 厚了, 耍 钱 耍 薄了

飲む 酒 飲む 厚くなった、遊ぶ 金 遊ぶ 薄くなった

「一緒に酒を飲む人は友情を深める。一緒にギャンブルする人はお互いに相手を傷つける」という意で、酒は友との良好な関係を進めるものだとして述べている (cf. C13)。「厚」と「薄」が用いられ、前句と後句との間は比較関係にあり、その原因は、「酒」と「お金」であるという。しかし、

C13" 酒肉 弟兄 千个 有, 落 难 之中 无 一人

酒肉 友達 千人 いる、落ちる 困難 の時 いない 一人

C13' のように前句と後句が転折関係になって、「酒を飲んだりして、つくった友達が多いが、困難に出会った時、誰も助けに来てくれない」と、酒肉の友のあやうさを表現している。前句の「千個」と後句の「一人」の対照は読み手に深い印象を与えるだろう。

#### 4、日中ことわざの類似点と相違点

##### 4.1 意味内容の対応の仕方

以上意味内容が対応している日中のことわざを2で示したグループに分け、対照比較してみた。その結果、当然とも言えるが、3.1の「表現は異なるが、意味内容が類似している両国のことわざ」に属するものは少なく、3.2の「表現と意味内容はほぼ同じであるが、由来が考証できぬ両国のことわざ」のグループに次いで、3.3の「表現は異なるが、意味内容が大体同じである両国ことわざ」のグループが最も多く見られる。

##### 4.2 類似点

以上の両国の酒に関することわざの類似点としては、人間は酒のことわざに世間の人間像、人間関係などを託している点である。例えば：

J13 酒は先に友となり、後は敵となる

C13 酒肉朋友，柴米夫妻，盒儿 亲戚

C13' 喝酒喝厚了，耍钱耍薄了

C13" 酒肉弟兄千个有，落难之中无一人

などのように酒をきっかけにし、人間関係が円滑にはかどったり、ギクシャクしたりする可能性があり、酒を飲めば、人は理性を失いがちになり、気をつけなければならないなどと述べている。

そして、内容から見ると、両国のことわざ共に酒の飲み方、酒と女、酒と友、酒と人間



関係などについて、言及している。酒それ自体の意味と表現全体からなる比喩的な意味を作り出している。

酒と女の関係については、両国とも批判的な態度を取っている。例えば：

J11 酒と女とばくちは男の三道楽

C11 酒荒色荒，有一必亡

C11' 酒乱性，色迷人

C11" 茶是花博士，酒是色媒人

などと、J11 では男が陥りやすい三つの道楽をいったもので、だから、「酒と女とばくちには錠をおろせ」とも言う。即ち、酒は身を持ち崩す原因となる最たるものだから、くれぐれも気をつけろといった意味で、中国では、「C11'、C11"」のような言い方があるが、日本では、酒をほとんど負けてしまう「ばくち」と同様に危険なものとしている点が中国の場合と少し異なっている。しかし、「酒」や「女」はそれ自体は悪くなく、自分の身を崩壊するのは男次第であり、また、女に対する差別的なニュアンスが含まれる言い方であるという点では類似している。また、

J12 下戸の建てたる倉もなし、お神酒あがらぬ神は無し

C12 吃酒三年穷，戒酒三年穷

のように、「下戸は酒を飲まないから金も貯まるだろうと思われるが、だからといって倉が建ったという話も聞かない。ならば適当に飲んで楽しんだ方がいい、という酒飲みの自己弁護の言葉」（永山・川嶋 1988, P. 110）もある。

#### 4.3 相違点

今回の分析ではおおかた類似していることわざの考察であるので、共通点の方は多いが、その中でも幾つかの相違点も見ることができる。例えば、

J13 酒は先に友となり、後は敵となる

C13 酒肉朋友，柴米夫妻，盒儿亲戚

というようなことわざの例では、日本の場合は、酒をきっかけにした友達はあとで敵にもなるほど危険な友の原因になり得ると指摘し、中国の場合は、酒を飲んだり、肉を食べたりしてつくった友達は、あまり頼りになれないというイメージが含まれており、わずかながら、考え方の違いを見て取ることができる。また、

J11 酒と女とばくちは男の三道楽

C11 酒荒色荒，有一必亡

の中では、J11 のほうは酒、女、ばくちのような道楽でみをもちくずすことを比喩的に表現しているが、C11 のほうでは、酒と女に耽溺すれば、自分が亡ぶ羽目になるというはっきりした結果を表現している。

それから、ことわざの形式から言うと、日本のことわざのほうは、対句や、三句ぐらい

の対比の形式で現われたものもあるが、単独句で成り立っているものが多く、中国のことわざのほうは、単独の一句からなっているものは少なく、対句の形式でなっているものが多い。例 J8、C8 のように、日本語の文は一文で成っているが、C8 は対句の形式で表現されている。また、一句目の酒に関する表現が二句目のより重い表現と合体することにより、重大な意味を表現している (cf. C10、C11)。

## 5. おわりに

以上、酒と酔態、酒と出世、酒と処世、酒と友、酒と人間性、酒と人間関係、酒の悪効果、酒と礼節などに言及していることわざについて対照比較考察を行った。これら日中のことわざは同じ物事に関する論述も多いが、意味的には微妙にずれていることわざもある。それは、日中両国の国民の異質の文化を背景にし、作られたことわざだからである。酒を巡り、日中両国民は酒と人類との関係を様々な立場から認識してきた。酒が発明されて以来、人々は酒と親しみながら、暮らしてきたことを物語ってくれる。中国と日本の地理環境からも、両国の友好の文化交流が昔から頻繁に行われており、お互いに影響し合いながら、「酒」は日本人の人生と中国人の人生に重要な意味を持ってきたと思われる。酒に関することわざのなかに、一部その光景が窺える。

誌面の都合で、中国の古典文学や詩句などから伝わってきた出典が考証できることわざと表現も意味内容も対応していない両国のことわざに関する対照考察ができなかったが、さらに、次の機会に、稿を重ねることとする。

### 【参考文献】

- 浮田三郎 (1988) 「日本語と現代ギリシア語 (方言) の諺対照比較研究 (2) 一素材「女」の見られる諺を中心に一」『広島大学教育学部紀要』第 2 部 第 37 号 PP. 301-309
- 王 仁湘 (2001) 『中国の飲食文化』 鈴木博 訳 青土社
- 温 瑞政 (1989) 『中国俗語大辞典』 上海辞書出版社
- 温 瑞政 (1991) 高橋均 高橋由利子翻訳 『諺語のはなし—中国のことわざ—』 光生館
- 金丸邦三 (2000) 『日中ことわざ辞典』 同学社
- 神崎宣武 (1994) 「日本の酒肴文化」『月刊言語』二十三巻第一号 大修館 PP. 36-37
- 金路 編著 (1996) 『中国俗語』 東方出版中心
- 尚学図書編集 (1982) 『故事・俗信ことわざ大辞典』 小学館
- 鈴木棠三 (1962) 『ことわざ処世術』 東京堂
- 田中清一郎 (1979) 『中国の俗諺』 白水社
- 永山久夫・川嶋宏 (1988) 『日本の粋を伝えることわざ—酒』 創拓社
- 何学威 陈素萍 (2003) 「论谚语形式美」『中南大学学报』第 9 卷 第 2 期 PP. 258-261